

電車内の迷惑行為評価に関する検討 —悪質行為はKYか?—

About Social Annoyance Behavior in Train.

北折充隆

Mitsutaka KITAORI

【問題と目的】

有史以来人類は、社会を構成して文明を発展させる形で種を保存してきた。社会の基本的な構造は、基本的に世代を超えて維持される（山極，2001）が、社会には一定の秩序があり、個々の行動はこの秩序に沿うように強制される。こうした秩序は一般に社会規範と呼ばれ、拘束性を伴う強制力と一体である（Weber, 1922）。社会規範は所属する集団やコミュニティによって様々であり、従うべきとされる行動期待も大きく異なる（Cohen, 1996；Dohrenwend & Chin-Shong, 1969；Somat & Vazel, 1999）。社会規範は、人間の社会的行動を理解し、説明する上でも非常に重要な概念であるが、解釈や説明上の意味づけにおけるコンセンサスすら確立されないままなのが現状である（Schaffer, 1983）。また、これまでの研究において、援助行動に影響する社会的責任規範などに関する検討は多く行われていても（*e.g.*, Berkowitz, 1972；Dion, Miller, & Magnam, 1971；Rutkowski, Gruder, & Romer, 1983）、逸脱行動についてはほとんど研究対象として扱われてこなかった。こうした理由にはいくつか考えられるが、1つには社会規範という概

念が、あまりにも多くの社会的行動に対する、様々な変数を予測・説明できることが挙げられよう。すなわち、社会規範はあらゆる行動判断に影響しており、場合によっては対立する2つの規範のうち、どちらの行動をとっても「規範に従った行動」になってしまう（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）。例えば、“ウソをついてはいけない”といった規範は、あらゆる個人が強く内在化している一方で、“ウソも方便”というように、場合によってはウソをつくことがむしろ望ましい行為であるとされてしまう。このように、望ましい行動志向が両価的であり、いずれの行動をとっても規範に準拠してしまうことが、社会規範の研究を困難とする大きな一因となってきた。

こうした問題を打破する形で、Cialdini & Trost（1998）は、社会規範を命令的規範（injunctive norm）と記述的規範（descriptive norm）の2つに分けて捉えている。これらは、社会規範が行動判断へ影響するプロセスを検討する上で非常に示唆的である。Cialdini *et al.*の定義に基づけば、命令的規範とは、多くの人々がとるべき行動や、望ましい行動と評価するであろうとの、個人の知

覚に基づく規範である。また、社会的報酬や罰をもって行動が志向され、法律の形成とも密接に関連する (*e.g.*, Staub, 1972)。命令的規範は社会や集団の価値観を反映しており、逸脱行動は社会的価値観への脅威となる (Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991)。このため、不適切と評価された行為がタブーとなったり、政府や組織により、法律として明文化される (Triandis, 1994)。もう1つの記述的規範とは、多くの人々が実際にとっている行動であるとの知覚に基づく。つまり、周囲の他者がとる行動を、その状況における適切な行動の基準であると認知することによる (Stiff, 1994; Gilbert, 1995)。こうした行動判断は、考える時間や手間を省かせ、高い確率で効果的な結果を得ることができる (Jacobs & Campbell, 1961)。記述的規範を支える概念に、Cialdini (1988) の社会的証明 (social proof) が挙げられるが、社会的証明は無意識のプロセスであり、行動判断に大きく影響するにも関わらず、情報を精緻化するようなことはあまりない。例えば、我々の日常生活において、テレビ番組に用いられる録音笑いなどは、社会的証明の応用例といえる。こうした録音笑いの効果については、無意識に見ているような同じ番組であっても、録音笑いがあった方がそうでない場合と比較して、視聴者が笑った回数が多かったり (Fuller & Sheehy-Skeffington, 1974; Young & Frye, 1966)、その番組をより面白いと感じた (Leventhal & Mace, 1970; Nosanchuk & Lightstone, 1974; Smyth & Fuller, 1972) などといった効果が得られている。実際の社会的行動を考えると、身近な他者がとる行動を判断の拠り所とすることは多いが (Bandura, Grusec & Menlove, 1967; Grube, Morgan & McGree, 1986)、そういった周囲の行動が正しいのかどうかを

考えることはあまりない。この点は非常に大きな問題であり、周囲のとっている行動が、必ずしも命令的規範に準拠しているとは限らない (Newcomb, Huba & Bentler, 1983)。

こうした背景を踏まえ、近年社会規範研究はこれら二つの枠組みで捉えられることが多い。ただ社会規範からの逸脱行動は、犯罪や革命、価値革新などといった非常に広範な概念である。このため、社会的に望ましいとされる行為からの逸脱は、社会的迷惑行為という定義で社会規範からの逸脱行為とは切り離され、近年多くの研究が行われている (石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉, 2000; 吉田・元吉・北折, 2000)。ここでいう社会的迷惑行為とは、「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」と定義される。こうした行為は近年大きな社会問題となっており、ルール意識やモラルの低下が叫ばれている (吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999)。特に、公共場面における社会的迷惑は多くの関心が払われており (松井, 2004; 尾関・吉田, 2007など)、本研究ではこうした社会的迷惑行為の中でも検討対象とされることの多い、電車内における迷惑行為に着目して検討をおこなう。

道路は無数の人の行き交う公共空間であり (蓮花, 2000)、個人の都合を優先させた身勝手な行動は、危険な交通錯綜を招くこととなる。しかしそれ以上に、電車内は密閉された自動車の中とは異なり、生身の人間が直接ふれあう社会空間である。1999年の公共広告機構によるCM“ジコ虫”が、日本新語・流行語大賞トップ10に入賞した。この中でも“電車で化粧に励む「メイク虫」”や“荷物で座席を占拠する「バショトリ虫」”などが取り上げられ、これらの行為が電車内の迷惑行為

として強く認知されていることが伺える。しかし、例えば電車内での化粧行為は、周囲にニオイを巻き散らかしたりケガの元になったりするわけではなく、迷惑と認知される理由として一番可能性が高いのは「見苦しい」ことであろう。逆に、荷物で座席を占拠する行為は座る場所をふさぎ、本来座れるはずのスペースが確保できないといった、実害を伴う迷惑行為である。そう考えると、様々な迷惑行為について迷惑評価には下位区分があり、迷惑であるとされる理由は様々である。具体的に、無神経で状況に即していない空気の読めない行為が、必ずしも危険で悪質な行為とは限らない。それにもかかわらず、こうした迷惑の根拠となる理由について、これまで研究が行われてきたことはほとんどなかった。北折・吉田(2000a)は自転車の駐輪違反に関する研究を行ったが、駐輪違反は通行妨害であり、自分とは関係のない第三者が被害を受ける行為である。これに対し、北折・吉田(2000b)における歩行者の信号無視は、自らの違反行為が交通事故を招く、いわば“”天罰型”の違反といえる。このように、被害を受ける対象や程度、根拠が異なるものを並列に扱うのではなく、どの行為がどういった被害を受け、どう評価されているのかを確認しておくことは意味深い。

以上をふまえ、本研究では電車内での様々な迷惑行為評価について、社会的にどう評価されるのかを多面的に比較・検討する。さらに、これらの評価と社会考慮との関連もあわせて検討することを目的とする。斎藤(1999)によれば、社会考慮とは“個人の生活空間を『社会』として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度”と定義される。こうした社会のことを考える態度を持っていることは、自分のおこないが社会にどういう影響を

及ぼすかに思い至り、自らの行動に一定の配慮ができる可能性が高い(元吉, 2000)。これを踏まえ、社会考慮が高い人は迷惑行為をどう評価し、どういった理由でその行為を迷惑とみなすのかについても本研究で明らかにする。社会考慮については仮説を設定できないため、探索的に検討する。

【方法】

調査対象 金城学院大学の学生176名を対象とし、一斉調査を行った。回答者は全員が女性であった。

調査時期 2007年7月、講義時間を利用し集団で質問紙調査を実施した。所用時間は20～30分程度であった。

調査内容 迷惑行為に関する質問項目：設問を大きく5つに分けて作成した。電車内の迷惑行為については、日本民営鉄道協会の「駅と電車の中の迷惑行為ランキング」(2005)の上位から本研究に対応する迷惑行為を抜粋した。また、携帯電話に関するマナーについては使用状況を3場面に分けて設定し、14項目を作成した。全ての設問で同項目について5件法で回答を求めた。迷惑行為を評価する基準として、設問1では「1.全く悪質だと思わない～5.極めて悪質だと思う」とした。設問2は「1.空気が読めない行為だとは全く思わない～5.極めて空気が読めない行為だと思う」とした。設問3は「1.全く見苦しい行為だとは思わない～5.極めて見苦しい行為だと思う」とした。設問4は「1.全く迷惑な行為だとは思わない～5.極めて迷惑な行為だと思う」とした。設問5は「1.全く無神経な行為だと思わない～5.極めて無神経な行為だと思う」とした。最後に、社会を考える個人の程度差を測るために「社会考慮尺度」を投入し、回答を求めた。尺度は斎藤(1999)の3項目(“自分の行動がい

かに社会に影響を与えているかを考えることがある”“自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある”“社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある”)に新たに10項目を追加した改訂版(吉田ほか, 1999)を使用した。回答は「1.まったくあてはまらない~5.非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

【結果】

社会考慮の因子分析結果 斎藤(1999)の社会考慮尺度について因子分析(主因子法)を行った(Table1)。因子負荷量が.45以上の項目を採用したところ、強い一因子性が見られた。これまでに行われた調査においても、社会考慮は強い一因子性が見られている(北折・大山・宗方, 2004; 大山・宗方・北折, 2005)。本研究でも強い一因子性が見られたためこれに習い、13項目を加算して一因子とした。

迷惑行為の評価基準比較 14項目の行為に

ついて、“悪質だ”“空気が読めない”“見苦しい”“迷惑だ”“無神経だ”の5つの評価軸で比較検討を行った(Table2)。その結果、全ての行為において評価感の差異が見られた。「1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている」については0.1%水準で有意差が見られ($F(2,152)=36.66, p<.001$)、迷惑で無神経な行為と評価される傾向が強かった。「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」についても0.1%水準で有意差が見られ($F(2,152)=21.60, p<.001$)、迷惑で無神経と評価され、5段階評価でいずれも4.0以上の極めて高い数値であった。「3. 携帯電話をマナーモードにしておらず、かかってきた電話の着信音が鳴っている」については0.1%水準で有意差が見られ($F(2,152)=10.93, p<.001$)、空気が読めない無神経な行為と評価されていた。「4. 携帯電話で話をする」については0.1%水準で有意差が見られ($F(2,152)=13.09, p<.001$)、迷惑で無神経と評価されていた。

Table1 社会考慮尺度13項目の因子分析結果

項 目	I
12. 自分の暮らす社会で今なにか問題になっているのか気になる	.71
13. 自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある	.71
2. 社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある	.68
9. 自分の生活と社会の仕組みがどのように関連しているかを考えることがある	.66
5. 社会の中で、自分はどのように行動すべきなのかを考えることがある	.63
1. 社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある	.63
11. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にどのように受けとめられるかを考えることがある	.60
4. 自分の行動がいかに社会に影響を与えているかを考えることがある	.58
8. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にいかなる影響を及ぼすかを考えることがある	.57
7. 社会の変化が、自分の生活にどのような影響を与えるかを考えることがある	.56
10. 社会の中で、自分がどのような立場におかれているかを考えることがある	.55
6. 自分の暮らす社会が将来どのようなようになっていくのか気になる	.51
3. 社会の中で、自分とは異なる立場にいる人々のことについて考えることがある	.48
自 乗 和	4.83

Table2 迷惑行為を評価別に見た平均と標準偏差

	悪質だ	空気が読めない	見苦しい	迷惑だ	無神経だ	F
1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	2.70 (0.97)	3.38 (1.07)	3.24 (1.14)	3.47 (1.13)	3.42 (1.08)	36.66 ***
2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している	4.12 (0.90)	4.22 (0.91)	4.50 (0.73)	4.57 (0.72)	4.58 (0.72)	21.60 ***
3. 携帯電話をマナーモードにしておらず、かかってきた電話の着信音が鳴っている	3.23 (1.05)	3.55 (1.11)	3.20 (1.21)	3.23 (1.08)	3.62 (1.02)	10.93 ***
4. 携帯電話で話をする	3.56 (1.18)	3.58 (1.18)	3.40 (1.17)	3.75 (1.10)	3.91 (1.03)	13.09 ***
5. 携帯電話でメールを打つ	1.36 (0.57)	1.54 (0.72)	1.58 (0.89)	1.46 (0.73)	1.52 (0.75)	4.49 **
6. 隣の人の肩にもたれて眠っている	2.89 (1.27)	3.10 (1.21)	3.20 (1.14)	3.63 (1.12)	3.26 (1.16)	22.16 ***
7. 大声で会話をしている	3.66 (1.09)	3.82 (1.04)	4.06 (1.04)	4.16 (0.94)	4.10 (1.01)	14.73 ***
8. 香水くさい、酒臭いなどの臭害	3.87 (1.04)	3.77 (1.04)	3.75 (1.10)	4.10 (0.93)	3.92 (1.02)	5.82 ***
9. 電車内で化粧をしている	2.86 (1.15)	3.36 (1.10)	3.85 (1.16)	2.63 (1.22)	3.32 (1.16)	55.53 ***
10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない	3.87 (1.05)	4.32 (0.84)	4.02 (1.10)	4.44 (0.88)	4.44 (0.86)	21.97 ***
11. ホームで並んでいる列に横入りをする	4.38 (0.80)	4.43 (0.81)	4.43 (0.80)	4.55 (0.69)	4.65 (0.60)	7.77 ***
12. ドアの付近に座り込んでいる	4.34 (0.88)	4.49 (0.76)	4.45 (0.85)	4.57 (0.72)	4.53 (0.77)	3.94 **
13. 電車内で飲食をしている	2.81 (1.16)	3.11 (1.15)	3.32 (1.19)	2.98 (1.23)	3.17 (1.29)	13.67 ***
14. 隣に座っている人が貧乏揺すりをしている	2.66 (1.22)	2.97 (1.29)	3.41 (1.20)	3.03 (1.21)	2.88 (1.23)	21.32 ***

※ () 内は標準偏差

*** $p < .001$,

** $p < .01$

「5. 携帯電話でメールを打つ」は1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=4.49, p<.01$), 空気の読めない見苦しい行為と評価されていた。ただ、最も高い“見しい”の数値は1.58であり、5件法の評価である点を考慮すると極めて低い値であった。「6. 隣の人の肩にもたれて眠っている」は0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=22.16, p<.001$), 迷惑で無神経と評価されていた。「7. 大声で会話をしている」についても0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=14.73, p<.001$), 迷惑で無神経と評価されていた。「8. 香水くさい、酒臭いなどの臭害」についても0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=21.60, p<.001$), 迷惑で無神経と評価されている点に相違はないが、やや悪質性評価も高くなっている(平均値3.87)。「9. 電車内で化粧をしている」は0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=55.53, p<.001$), 空気の読めない見苦しい行為と評

価されていた。「10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない」は0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=21.97, p<.001$), 迷惑で無神経な行為と評価される傾向が強かった。この傾向は「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」について ($F(2,152)=7.77, p<.001$), および「12. ドアの付近に座り込んでいる」についても同様の傾向であった ($F(2,152)=3.94, p<.01$)。「13. 電車内で飲食をしている」は0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=13.67, p<.001$), 見苦しくて無神経な行為と評価されていた。「14. 隣に座っている人が貧乏揺すりをしている」は0.1%水準で有意差が見られ ($F(2,152)=21.32, p<.001$), 見苦しくて迷惑な行為と評価されていた。

統計的な分析は行わないが、Table2をそれぞれの評価基準に見ていく。平均値4.0以上の行為を高い値とみなすと、悪質と評価さ

れる傾向が高い行為は「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」などであり、「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」などは空気が読めない行為と評価されていた。また、見苦しい行為と評価されていたのは「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「7. 大声で会話をしている」「10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」であり、

「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「7. 大声で会話をしている」「8. 香水くさい、酒臭いなどの臭害」「10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」は迷惑と評価される傾向が強かった。また、「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「7. 大声で会話をしている」「10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」などは無神経な行為とされていた。

社会考慮との関連について 社会考慮との関連を見るため、14の行為と5つの評価別に相関係数を算出した (Table3)。これによる

Table3 迷惑行為評価と社会考慮との相関係数

	悪質だ	空気が読めない	見苦しい	迷惑だ	無神経だ
1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	.19 *	.03	.19 *	.11	.15
2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している	.08	.18 *	.15	.02	.14
3. 携帯電話をマナーモードにしておらず、かかってきた電話の着信音が鳴っている	.17 *	.23 **	.12	.12	.09
4. 携帯電話で話をする	.10	.07	-.05	.17 *	.11
5. 携帯電話でメールを打つ	.06	.08	.06	.16 *	.12
6. 隣の人の肩にもたれて眠っている	.02	.08	.23 **	.13	.21 **
7. 大声で会話をしている	-.08	-.05	.14	.10	.13
8. 香水くさい、酒臭いなどの臭害	.15	.20 *	.08	.21 *	.12
9. 電車内で化粧をしている	.07	.04	.04	.19 *	.18 *
10. ドアの開閉時に扉の間近に立っているのにどかない	.27 **	.10	.14	-.02	.17 *
11. ホームで並んでいる列に横入りをする	.07	.12	.18 *	.16 *	.14
12. ドアの付近に座り込んでいる	.04	.17 *	.05	-.06	.07
13. 電車内で飲食をしている	.05	.19 *	.09	.01	-.01
14. 隣に座っている人が貧乏揺すりをしている	.11	.25 **	.11	.14	.17 *

※ 例えば「1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている」と「悪質だ」の間の相関“.19”は、
「社会考慮が高いほど聞いている音楽がイヤホンから漏れていることを悪質だと評価する傾向が高い」ことを示す *p<.05

と、社会考慮が高い人ほど「1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている」を悪質で見苦しい行為と評価し、「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」ことを空気が読めない行為としていた。また、「3. 携帯電話をマナーモードにしておらず、かかってきた電話の着信音が鳴っている」を悪質で空気が読めない行為で、「4. 携帯電話で話をする」ことを迷惑と評価していた。さらに、「5. 携帯電話でメールを打つ」ことを迷惑と、「6. 隣の人の肩にもたれて眠っている」ことを見苦しくて無神経と評価していた。「8. 香水くさい、酒臭いなどの臭害」ことも空気が読めない迷惑な行為と評価しており、「9. 電車内で化粧をしている」ことを迷惑で無神経と考える傾向が強かった。「10. ドアの閉閉時に扉の間近に立っているのにどかない」行為は社会考慮が高ければ悪質で無神経と評価する傾向が高く、「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」行為は見苦しくて迷惑と回答していた。また、「12. ドアの付近に座り込んでいる」および「13. 電車内で飲食をしている」ことは空気が読めない行為であり、「14. 隣に座っている人が貧乏揺すりをしている」のは空気が読めない無神経な行為と評価されていた。

【考察】

本研究では、電車内の迷惑行為について多面的評価との関連を検討した。Table 2 を概観してまずいえることは、「悪質だ」「空気が読めない」「見苦しい」「迷惑だ」「無神経だ」といった5つの評価基準は独立ではなく、互いに関連した概念である可能性が高い。全体の平均値を見てみると、例えば「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」行為は、5

件法で平均値が4.12~4.58の間にあり、極めて“悪質で空気が読めず見苦しくて迷惑で無神経な”行為といえる。逆に、「5. 携帯電話でメールを打つ」行為は1.36~1.58のレンジでありいずれも極めて低い。もしもこれらが独立していれば、5つ全ての数値が高くなるといったことはなく、特定の数値が突出することになる。しかしそうした傾向は見られず、有意差は見られたもののこれらは一貫した傾向であると考えられた。

行為別に見ると、「2. 足を大きく広げて座ったり、荷物を隣に置くなど座席を一人で大きく占領している」「11. ホームで並んでいる列に横入りをする」「12. ドアの付近に座り込んでいる」等は一貫して全ての数値が4.0以上であり、かなり重大な迷惑行為と見なされていることが示唆される。これらはいずれもスペースの侵害行為であり、ルールに則って乗車している人たちが実害を被るような行為である。そして、これらの行為はいずれも「迷惑だ」と「無神経だ」について数値が特に高く、他者に対する思慮が及ばないと評価されていることを意味している。また、本調査は5件法で回答を求めており、中央値は3となる。平均値が3前後の違反行為は「1. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている」「3. 携帯電話をマナーモードにしておらず、かかってきた電話の着信音が鳴っている」「4. 携帯電話で話をする」「6. 隣の人の肩にもたれて眠っている」「9. 電車内で化粧をしている」「13. 電車内で飲食をしている」「14. 隣に座っている人が貧乏揺すりをしている」などであった。これらはそれほど重大な迷惑行為とは見なされておらず、スペース侵害行為とは明らかに一線が画される行為である。行為を個々に見てみると、騒音行為および飲食や化粧などの「見苦しい」とみなされる行為が含まれている。特筆され

るのは、携帯電話の会話がこうしたレンジの迷惑行為と見なされるのに対し、「5. 携帯電話でメールを打つ」がほとんど重大な行為と見なされていない点である。携帯電話の普及期に利用マナーとの関連を検討した研究はあるが(森・石田, 2000a; 2000b; 石田・森, 2000), この当時は鉄道各社も携帯電話に対する規制取り組みの姿勢がまちまちであった(北折, 2000)。当時と比較してこれだけ使い方の評価に差が出てきたことは、携帯電話の社内でのメール使用は許容されていても会話は許されないという、暗黙のコンセンサスが確立されてきていることの傍証であろう。このほか全体的な傾向として、5つの評価項目のうち、「迷惑だ」と無神経だ”の評価が最も高くなる傾向を示した行為が項目“1.” “2.” “4.” “6.” “7.” “8.” “10.” “11.” “12.”の9項目であり、迷惑認知は無神経と感じることに影響している可能性が示された。また、一般に“空気が読めない”ことと“無神経だ”は同じことのように捉えられることも多いが、本研究でこの二つに顕著な連動は見られず、異なる概念として理解されている可能性が高いことがあわせて示された。

次に社会考慮との関連について。Table 3を縦に概観すると、特に「空気が読めない」との相関が14項目中6項目に見られ、社会考慮が高いほど、迷惑行為を空気が読めない行為と評価する傾向が高かった。社会の成り立ちや仕組みを理解し、自らの行為がどういった影響を及ぼすのかに思い至る社会考慮は、周囲の雰囲気や察知して的確な行動や言動をとれるかといったことと関連する。近年、こうした空気が読めないことは“KY”と称され、2007年度の先読み流行語大賞大賞を獲得したように大きく注目されている。本研究で得られた知見に基づけば、状況を察知するような能力は社会考慮を高めることで高められ

る可能性が高い。吉田・廣岡・斎藤(2002; 2005)は、高校での授業カリキュラムの中で、心理学の理論を用いた社会性や社会考慮を高める科目を提案している。こうした試みは在学中の生徒や学生に対して一定の効果が期待されるが、すでに学校を卒業したケースに適用はできない。一般的な社会人に対して社会考慮を高め、状況を的確に捉える能力を鍛えるようなプログラムの開発が望まれよう。ただ宗方・北折・大山(2006)の学生を対象とした4年間の縦断調査によれば、社会考慮は入学時から徐々に上昇し、就職活動を行っている3年生の後期から4年生の前期にピークを迎え、就職活動を終える4年生の後期には低下するという結果を示している。こうした結果を見る限り、社会考慮は安定した性格特性のようなものではなく、“社会考慮意識”と呼ばれるような、自己が置かれた状況や場面によって変動する意識のような概念であると考えられる。こうした事実も含め、社会考慮と空気が読めないこととの関連は、今後さらなる検討が必要であろう。また、“迷惑だ”との間にも空気が読めないのに次いで5つの相関が見られた。このことは、社会考慮が高い人ほど各行為のことを“迷惑だ”と評価する傾向が強いことを示す。社会考慮が高い人は行為を迷惑だと認知する傾向も強く、自分の行動について思い至るだけでなく、他者の行為についても厳しい目を向けているともいえる。社会考慮を高めることで迷惑行為は抑制されることが期待されるが、ある行為を迷惑と認知する傾向も高くなるため、実社会でのストレスも高くなると予測される。こうした因果関係については本研究では検討しきれないため、さらなる検討が必要であろう。

最後に本研究で明らかにできなかった課題も多い。まず、本研究では5つの評価基準を用いて迷惑行為との関連を検討したが、これ

以外の評価基準を探っていくことは残された大きな課題である。本研究では14の迷惑行為を5つの観点から回答を求めたため、70の類似した項目に回答を求められたことになる。これ以上の負担を強いることができなかったため、5つの評価基準が本研究の限界であった。今後はさらなる指標の投入と、関連の検討が課題であろう。また、本研究では被験者がいずれも女子大学生であった。北折(2007)など過去の研究では、一貫して女性よりも男性の方が逸脱志向的であり、男女比較では異なるパターンを示すと予測される。性差についても今後明らかにしなければならない重要な課題であり、これらをふまえて総合的に迷惑を規定する要因を明らかにしていく必要が今後求められよう。

【引用文献】

- Bandura, A., Grusec, J. E., & Menlove, F. (1967). Vicarious extinction of avoidance behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 16–23.
- Berkowitz, L. 1972 Social norms, feelings, and other factors affecting helping and altruism. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.6, New York: Academic Press. pp.63–108.
- Cialdini, R. B. (1988). *Influence: Science and practice*. Scott, Foresman and Company. (社会行動研究会(訳)(1991). 影響力の武器 —なぜ人は動かされるのか— 誠信書房)
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 24, New York: Academic Press. pp.201–234.
- Cialdini, R. B., & Trost, M. R. (1998). Social Influence: Social Norms, Conformity, and Compliance. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*. Vol. 2 (4th ed.), New York: McGraw-Hill. Pp.151–192.
- Cohen, D. (1996). Law, social policy, and violence: The impact of regional cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 961–978.
- Dion, K. L., Miller, N., & Magnan, M. N. (1971). Cohesiveness and social responsibility as determinants of group risk taking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 400–406.
- Dohrenwend, B. P., & Chin-Shong, E. (1969). Social status and attitudes toward psychological disorder: The problem of tolerance of deviance. *American Sociological Review*, **32**, 417–433.
- Fuller, R. G. C., & Sheehy-Skeffington, A. (1974). Effects of group laughter on responses to humorous material, a replication and extension. *Psychological Reports*, **35**, 531–534.
- Gilbert, D. T. (1995). Attribution and interpersonal perception. In A. Tesser (Ed.), *Advanced social psychology*. New York: McGraw-Hill. pp.99–147.
- Grube, J. W., Morgan, M., & McGree, S. T. (1986). Attitudes and normative beliefs as predictors of smoking intentions and behaviors: A test of three models. *British Journal of Social Psychology*, **25**, 81–93.
- 石田靖彦・森久美子(2000) 迷惑の生成と受容に関する研究(2) —『列車内での携帯電話の使用』に関する議論の変遷— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集 pp.102–103.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛(2000). 社会的迷惑に関する研究(2) —迷惑認知の根拠に関する分析— 名古屋大学教育発達科学研究科紀要(心理学) **47**, 25–34.
- Jacobs, R. C., & Campbell, D. T. (1961). The perpetuation of an arbitrary tradition through several generations of a laboratory microculture. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 649–658.

- 北折充隆 (2000). 社会規範とは何か —当為と所在に関するレビュー— 名古屋大学教育発達科学研究科紀要 (心理学) **47**, 155-165.
- 北折充隆 (2007). 社会規範からの逸脱行動に関する心理学的研究 風間書房
- 北折充隆・吉田俊和 (2000a). 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動におよぼす影響について —大学構内の自転車の駐輪違反に着目したフィールド実験— 実験社会心理学研究 **40**, 28-37.
- 北折充隆・大山小夜・宗方比佐子 (2004). 4年間の大学生活は、学生の意識と行動に何をもたらすのか —縦断調査による新設学部学生への社会心理学的アプローチ— 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 **8**, 1-17.
- 北折充隆・吉田俊和 (2000b). 記述的規範が歩行者の信号無視行動におよぼす影響 社会心理学研究 **16**, 73-82.
- Leventhal, H., & Mace, W. (1970). The effect of laughter on evaluation of a slapstick movie. *Journal of Personality*, **38**, 16-30.
- 松井洋 (2004). 社会的迷惑行為に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 **15**, 55-68.
- 宗方比佐子・北折充隆・大山小夜 (2006). 4年間の大学生活は、学生の意識と行動に何をもたらすのか 3 —縦断調査による新設学部学生の4年間変遷に関する総合研究— 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 **10**, 13-37.
- 森久美子・石田靖彦 (2000a). 迷惑の生成と受容に関する基礎的研究 —普及期の携帯電話マナーに関する言説分析— 愛知淑徳大学論集 (コミュニケーション学部篇) **1**, 77-92.
- 森久美子・石田靖彦 (2000b). 迷惑の生成と受容に関する研究 (3) —携帯電話の何が問題なのか? 普及期以降の新聞記事の分析— 日本社会心理学会第41回大会発表論文集 pp.104-105.
- 元吉忠寛 (2000). 社会考慮が西暦2000年問題の認知・対策行動に及ぼした影響 社会心理学研究 **18**, 1-10.
- Newcomb, M. D., Huba, G. J., & Bentler, P. M. (1983). Mother's influence on the drug use of their children: conformity tests of direct modeling and mediaional theories. *Developmental Psychology*, **19**, 714-726.
- Nosanchuk, T. A., & Lightstone, J. (1974). Canned laughter and public and private conformity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 153-156.
- 大山小夜・宗方比佐子・北折充隆 (2005). 4年間の大学生活は、学生の意識と行動に何をもたらすのか 2 —縦断調査による職業意識および対人関係の変遷過程の検討— 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 **9**, 1-21.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知—組織風土・集団アイデンティティによる検討— 実験社会心理学研究, **47**, 26-38.
- 蓮花一己 (2000). カーコミュニケーション 高木修 (監修) 交通行動の社会心理学—運転する人間の心と行動—北大路書房 pp92-99.
- Rutkowski, G. K., Gruder, C. L., & Romer, D. (1983). Group cohesiveness, social norms, and bystander intervention. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 545-552.
- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑と社会を考慮すること 愛知淑徳大学文学部論集 **24**, 67-77.
- Schaffer, L. S. (1983). Toward Pepitone's vision of a normative social psychology: What is a social norm? *Journal of Mind and Behavior*, **4**, 275-294.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 24, New York: Academic Press. Pp.93-159.
- Somat, A., & Vazel, M-A. (1999). Normative clear-sightedness: a general knowledge of social valuation. *European Journal of Social Psychology*, **29**, 691-705.
- Staub, E. (1972). Instigation to goodness: The role of social norms and interpersonal influence. *Journal of Social Issues*, **28**, 131-150.
- Stiff, J. B. (1994). *Persuasive communication*. New York: Guilford.
- Triandis, H. C. (1994). *Culture and social behavior*. New York: McGraw-Hill.
- Weber, M. (1922). *Wirtschaft und Gessellschaft*.

- 清水幾太郎（訳）（1972）. 社会学の根本概念
岩波文庫
- 山極寿一（2001）. 人間社会の由来—ゴリラ, チンパンジー, ボノボ社会の比較から— 松沢哲郎・長谷川寿一（編）心の進化—人間性の起源を求めて— 岩波書店 pp.141—149.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆（1999）. 社会的迷惑に関する研究（1）名古屋大学教育学部紀要 **46**, 53—73.
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志（編著）（2002）. 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」—心理学を活用した新しい授業例— 21世紀型授業づくり48 明治図書
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志（編著）（2005）. 学校教育で育む「豊かな人間関係と社会性」—心理学を活用した新しい授業例 Part2 21世紀型授業づくり 99 明治図書
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆（2000）. 社会的迷惑に関する研究（3）—社会考慮・信頼感による人の分類と社会認識・迷惑対処方略の関連— 名古屋大学教育発達科学研究科紀要（心理学）**47**, 35—45.
- Young, R. O., & Frye, M. (1966). Some are laughing: Some are not-why? *Psychological Reports*, **18**, 747—754.

※本論文は、平成19年度卒業生である種村沙織による卒業論文のデータの一部を用い、筆者が再分析・まとめ直したものである。記して感謝する。